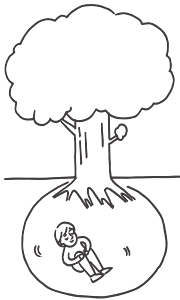


# インタビュー | 井原 夏美 (No.101)

好き：美術（現代美術）



## Q.自分のベースになったと思う原体験は？

本を読む家族で、家にいつでもありましたね。小中高と文学少女で、ずっと図書館にいて、夏休みも。年間100冊読むというのを目指している子どもでした。

親戚にフィルムカメラをもらったのをきっかけに写真を撮るようになって、面白くなっちゃって、先生から褒められたり、高文連で入選したりするようになってのめり込み始めて。

写真を撮っていくうちに、本屋で写真集を読んだりするようになってました。

## Q.どこで、誰と出会う？

大学も文学部に行こうと思ってたんですけど、親に「せっかく写真やってきたんだから」と、札幌市立大学を薦められて。市立大に入ることになったんです。

上遠野先生の美術史の授業もそうだし、ドイツ人の映像作家の先生なんかの授業や横浜トリエンナーレを見に行ったりして…

## Q.何を見た？

大学2年生ときに中島洋さんの中学生の映画をつくるワークショップに誘われて、そのボランティアスタッフも同時にやり始めたのをきっかけに、現代美術や映画をいっぱい見るようになったんです。

同じくらいのタイミングで行っている横浜トリエンナーレの出品作品に映像作品や写真作品が多くて、自分がやっていることと合わさって、なんか入りやすかったって言うか…そこから始まっているんなアートがあるんだっていうのを大学でいっぱい学んだ気がします。

## Q.どう感じた？

現代アート面白いかも！って思うようになりました。

こんなに好きになるとは思わなかったねって、母とか家族にも言われるぐらい、すごい好きになっちゃったんです。

文学が好きだったせいか、考えてみると好きなアーティストもちょっと虚構と現実が入り混じるようなそういう物語みたいなものを作れる人に惹かれるのかもしれない。

## Q.そのあとのストーリー

中島洋さん（シアターキノ代表）の映画をつくるワークショップにのめり込んでいくうちに、制作やプロデュースが面白くなってしまい、作品をつくるという方にはいなくなりました。

大学3年生ぐらいの時の学芸員の授業で、博物館学に興味を持って。映画制作と同じく、裏方の世界が面白いと思うようになる中で、物のライフヒストリーという考え方であって、すごくアートっぽい！って。コンセプチュアルで面白い世界だなんて思って。

そのあともとの雑貨好きと、博物館学への興味がミックスされて、大学院ではミュージアムグッズの研究をするようになったんです。

